

## ナチス・イデオロギーの多元性：ナショナリズムとジェンダー配置の考察

福元, 圭太  
九州大学大学院言語文化研究院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/7407613>

---

出版情報：かいろす. 40 (別冊), pp.115-127, 2002-12-10. かいろす同人  
バージョン：  
権利関係：



「かいろす」第40号別冊  
平成14年12月10日発行

ナチス・イデオロギーの多元性  
— ナショナリズムとジェンダー配置の考察 —

福元圭太  
(Keita FUKUMOTO)

(Kairos 40)

Kairos-Gesellschaft für Germanistik

Fukuoka Japan 2002



# ナチス・イデオロギーの多元性

— ナショナリズムとジェンダー配置の考察 —

福元圭太

## 0. はじめに

ある書物やイデオロギーを批判するために多くのフレーズを引用したり論じたりする場合、批判する者がもしかすると批判している対象に密かな魅力を感じているのではないか、という嫌疑をかけられる場合がままある。また批判するということはそれだけ問題にしているわけであって、唾棄すべきものであるならば、初めから無視すればよいではないか、というのはなるほどうがった考え方ではある。

これから論じようとするアルフレート・ボイムラーやアルフレート・ローゼンベルクのテキスト<sup>1)</sup>に筆者が魅力を感じているのではないか、というのはしかし当たらない。唾棄すべきものも何度も少しずつ手を変え品を変え再構築され、またもや蒙昧なイデオロギーとして立ちあらわれるとするならば、それらは「初めから無視すればよい」ものではないはずだ。ボイムラーやローゼンベルクを引くのも、それに筆者が「密かな魅力」を感じているのではなく、いつ何時復活するかもしれない怪しげなイデオロギーに対する免疫力を高めるためであることを、言わずもがなのことながら記しておく。

## 1. アルフレート・ローゼンベルクの『20世紀の神話』

1930年の2月に発刊されるや爆発的な売れ行きを見せ、翌31年10月には早くも3版、1937年には50万部を突破した『20世紀の神話』は、ヒトラーの『我が闘争』につぐナチズムの聖典として悪名高い。

1893年、当時帝政ロシアの領土であったバルト三国、エストニアのハンザ同盟都市レヴァールで、古いドイツ商館支配人の息子として生を受けたアルフレート・ローゼンベルクは、15歳で反ユダヤ主義の古典とされるヒュー

ストーン・ステイワート・チェンバレンの『19世紀の基礎』を読んで強い印象を受けたらしい。1910年、ラトヴィア首都、リーガの工科大学に入学、建築を専攻するが、読書は広範囲にわたり、インド哲学などにも傾倒した。『20世紀の神話』にインド哲学に関する記述が多く見られるのも、ローゼンベルクの若き日の読書傾向のなせるわざであろう。大学時代は学生団体、ルポーニアの幹部として活躍。大戦が始まってしばらくした1915年、リーガ工科大学は教授もともモスクワに強制移動しなければならず、ローゼンベルクもモスクワへ赴いている。1917年、クリミア半島にいたローゼンベルクは祖国ドイツの義勇軍に加わるべくエストニアに戻るが、ドイツ軍はやってこず、再びモスクワへ戻り大学を卒業。故郷のレヴァールで教職に就く。しかしその年のうちに教職を離れ、1918年11月3日、まずベルリンへ、そしてミュンヘンへと移る。当地でディートリヒ・エックルトを通じてヒトラーの知己を得る。1921年からエックルトとローゼンベルクはナチスの機関紙「フェルキッシェ・ベオバハター」の主筆の一人となり、1925年にエックルトが病気のために引退するや、一人で主筆をつとめるようになった。その間、1923年のヒトラーによるミュンヘン一揆にも参加している。1930年9月には国民社会主義ドイツ労働者党議員、党外交部長をつとめ、10月には『20世紀の神話』を上梓している。

『20世紀の神話』は3つの部分から構成されている。それぞれを概観してみよう。

第1篇「価値の闘争」においては、純粋な血によって結ばれたアーリア民族の共同体の優位性をインドにまで遡って検証しようとしている。曰く、アーリア民族の二大特性は「名誉」と「自由」にあり、マイスター・エックハルトとゲーテを称揚して第1篇は閉じられる。

第2篇「ゲルマン芸術の本質」では意志的でダイナミックなゴシック建築が礼讃される。ローゼンベルクはゲーテとともにシュトラスプールの教会を愛で、ベートーヴェンの「エロイカ」に酔い、ヴァーグナーの楽劇を賞賛する。芸術はもはや宗教の代用品、いな宗教そのものとなる。

第3篇「来るべき国」では第三帝国の社会、国家、経済、植民政策、教会、性、教育等が論じられる。ユダヤ的世界金融は非難攻撃され、同じ全体主義でもオットマール・シュパン流の位階制度的なモデルは、ローマ的な僧院的ヒエラルキーとして批判される。来るべき国に向けて血と民族の結束を説くことで、ローゼンベルクの長大な著作は閉じられる。

我々にとって興味深いのはこの第3篇「来るべき国」の第2章におかれている「国家と性」という部分である。ローゼンベルクは性の分極を強調し、それぞれのジェンダーを固定して女性にある特定の役割を有無を言わず振り分けようとする。

男性は研究、発明、創造のあらゆる領域において女性より優れているのであるが、女性の価値は、同じように重要で、他のすべての価値の前提となる血液の保持(Blutserhaltung)と人種の増加(Rassenvermehrung)とに基づいているのである。(Rosenberg, S. 483.)

女性のジェンダーは生殖にある、しかも純粋な血は守らねばならない、という主張は性差別、人種差別のナチス的表現であるが、近年の旧ユーゴスラヴィア内戦でも同様のイデオロギーが跳梁していたことは、人間がいかに歴史から何も学ばないかを如実に示している。やや長くなるが、ローゼンベルクから性および人種差別に関する決定的な発言を引いてみる。

女性の手中に、その性質の中に我々の人種の保持は握られている。どの民族も政治的隷属状態からは、いつの日か脱出することができようが、人種の疫病からは脱出不可能である。一国民の女性が黒人やユダヤ人の私生児を産めば、やがて黒人「芸術」の泥水が、今日のごとく、滔々とヨーロッパに流れ込むであろうし、ユダヤ人の媚屈の文学(Bordell=Literatur)が現在のように家庭内にまで持ち込まれるようになれば、クアーフュルステンダムのユダヤ人<sup>2)</sup>も今後は「同胞」とみなされ、結婚の資格のある男性(ehemäßiger Mann)とみなされることだろう。そうすればやがていつかはドイツ(および全ヨーロッパ)の精神的中心地には私生児だけが居住するといった事態に至りかねない。ユダヤ人は今日、性愛の「復活」説によって — ただまた女性解放論の助けを借りて — 我々の存在一般の根幹を浸食している。覚醒しつつあるドイツが鋼鉄の箒と仮借なき規律を以て、いつ徹底的浄化(eine restlose Säuberung)を行うのかは不明である。しかしながらすでに今日においては何よりもまず、人種の浄化を説くことが、女性の最も神聖にして偉大なる使命であると言えよう。(Rosenberg, S. 510f.)

黒人とユダヤ人は純粋なる血液に疫病をもたらす敵であり、徹底的浄化が必要であるという文言は、そのままアウシュヴィッツのガス室へと繋がっている。

また危険視されているのは「女性解放」(Frauenemanzipation)である。この「危険思想」はどこからやってきたのか。もちろんその出自はドイツではない。「女性に政治的平等を要求することは、フランス革命の思想の自然な結果であった」(Rosenberg, S. 493.)。解放された女性がまず要求するのは、ローゼンベルクによれば墮胎の権利であるらしい。墮胎がもたらすのは人種の衰退、すなわち未来の兵士の減少である。しかもこれは民主主義者やマルクス主義者との共同の陰謀であるという。「こうした女性解放学者たちやその熱心な追従者たちはやはり、我々の人種の破壊と根絶を狙っている民主主義やマルクス主義の政策全体と見事な共同戦線を張っているわけである」(Rosenberg, S. 505f.)。ローゼンベルクは女性に次のような要請をつきつける。

女性解放論から女性を解放することこそ、民族と人種、永遠に無意識的なもの、あらゆる文化の基礎を没落から救済してもらいたい女性たちへの、第一の要求なのである。(Rosenberg, S. 512.)

女性たちが女性解放論から自らを解放しているあいだに男性は何をしているのであろう。男性のみが、いや集団としての男性、男性同盟(Männerbund)のみが国家を形成する力であるとされる。「国家はいずこにあっても男女の共同的思想の結果であったことはない。それは何らかの目的に向かって努力する男性同盟の結果であった」(Rosenberg, S. 485.)。ローゼンベルクは古代ギリシアのスパルタとアテネに遡り、国家形成力としての男性同盟を例証しようとする。スパルタは民主主義化して衰退しかけていたとき、再び男性同盟を復活させて勢力を盛り返した、彼らは互いを「兄弟」と呼び合った。アテネでも青年団(Jugendbund)すなわちエフェビー(Ephebie)が最も重要であり、アリストテレスもアテネの政体を論ずる際、この「国家化された青年団」(Rosenberg, S. 489.)から説き起こしている、アテネでも解体しかけていた個人主義的な民主主義がアリストテレスの時代の直前において、好戦的な古代ギリシアの男性同盟を復活させたい。それは「現在の言葉でいえば、アテネ自由民の青年全部

に対する一般徴兵義務の施行」(Rosenberg, S. 489.)に他ならない、云々。

このような男性同盟のなかで「北ヨーロッパ人に最も合致し、名誉と義務の上に築きあげられた、構成美を保持している最も壮大な範例の一つ」(Rosenberg, S. 493.)がプロシアの、そしてそれを継承したドイツの軍隊であるらしい。ローゼンベルクがその他に枚挙する男性同盟には次のようなものがある。13世紀の剣友騎士団 (Schwertritterorden)、テンプル騎士団、フリーメーソン、イエズス会、ユダヤ・ラビ集団、イギリスのクラブ、ドイツ学生団、1918年以降のドイツ義勇軍、そしてナチスの突撃隊である。さすがにここではドイツだけに範囲を限定することはできなかつたようだ。国家形成力としての男性同盟と女性との関係においても、支配者はもちろん男性である。男性国家という言葉はローゼンベルクにとっては「本来ひとつの同語反復」(eigentlich eine Tautologie) であるが、女性国家というつながりは「自家撞着」(Widerspruch) にすぎない(Rosenberg, S. 500.)。

振り子が二つの類型 — 男性国家と女性国家 — の間を動いていると考えたり、均衡や「同権」のような中間状態が求むべき文化の目標であると考えたりしてはならない。むしろ「振り子の動き」が男性的類型形成から離反することは墮落の時代を意味する。その時振り子は新しい類型に動いていくのではなく、泥沼にはまり込むのである。(Rosenberg, S. 500.)

女性に参政権を与え、ジャズやダンスが流行し、民主主義が叫ばれるヴァイマル共和国がローゼンベルクの夢見る男性同盟国家であることはあり得ない。『20世紀の神話』という「世界大戦において名誉と自由のために、ドイツの生活とドイツ国のために戦死した200万人のドイツの勇士のために」<sup>3)</sup>捧げられた書物では、男性同盟による国家はどこにあったのであり、どこに到来するのといわれるのか。

1914年から1918年にいたるまでは本当のドイツ国はもはやドイツ内には存在せず、戦線に存在していたのだ。フォークランド島 (Falklandinseln) の沖合いや青島、ドイツ領東アフリカ、インド洋、イギリスの空などの戦線に存在していたのである。(Rosenberg, S. 519.)

そして来るべき男性同盟国家が第三帝国であることは言を俟たない。

## 2. アルフレート・ボイムラーの『男性同盟と学問』

アルフレート・ボイムラーは、カント美学の研究者、また1920年代におけるバウハウス・ルネサンスを担った哲学者であるが、アルフレート・ローゼンベルクと並ぶナチスのイデオログであり、ナチスが政権を掌握してからすぐにベルリン大学の政治教育学教授として迎えられ、あの悪名高いベルリンの「焚書事件」でも中心的役割を果たした。ボイムラーはニーチェ哲学を高く評価し、遺稿集『生成の無垢』ならびにクレーナー版のニーチェ全集を編集している。ボイムラーにとってニーチェの哲学は、「闘争の形而上学」の様相を呈する。闘争においては「然り」と「否」しか、決断と行動しかない。『権力への意志』におけるニーチェの、力の不平等性の認識から、ボイムラーは権力的支配を「正義」と等値する。この権力支配の正当性の主張と「ゲルマン的なもの」の再生願望が結託し、「非ゲルマン的なもの」、デモクラシーや社会主義などの国家を衰弱させるとされるものの排除と、国家の絶対的な支配意志の再生とが叫ばれるのである。ニーチェはこのように、ナチスの自己正当化に動員されるのであり、「ボイムラーのニーチェ観には、ナチス・イデオロギーにおいてニーチェがどのような受容のされ方をしたかに関する一つの典型例を見ることができる」<sup>4)</sup>。

ボイムラーは1934年にその名もまさに『男性同盟と学問』という書物を刊行している。この書物はボイムラーの1929年から1933年にわたる講演を集めたもので、テーマは第一次世界大戦の総括からドイツ式体操の意義、数学や物理学、学生論、国家論に涉っている。しかしその中心的な関心事はあくまで「男性同盟」であり、しかも国家形成力としてのそれである。また女性は周縁的な、むしろ破壊的な要素と考えられており、その点ではローゼンベルク以上にアンティ・フェミニスティッシュである。この講演集の序文でボイムラーはこう述べる。

ここで私は男性同盟を、いわばそれ自体一つの問題として考察しているが、男性同盟がただ国家によってのみ生命と真実を獲得すること、また国家も男性同盟によってのみ生命と真実を獲得するということに、

決して疑いを持つことはなかった。友情と同志愛 (*Freundschaft und Kameradschaft*) は、共通の課題に立ち向かう真剣さが続べる時においてのみ真正なものとなるのである。(Baeumler, Vorwort)

1930年10月17日、ローゼンベルクの『20世紀の神話』が刊行されたのと同じ年に、ボイムラーは、後にこの書物に所収されることとなった「大学の独身男性の小屋」(*Das akademische Männerhaus*. オリジナルのタイトルは *Die Erinnerung des studentischen Hauses*) という講演を行う。「独身男性の小屋」というのはやや奇異に聞こえるかもしれないが、この講演全体がハインリヒ・シュルツの1902年の著作『年齢集団と男性同盟』(*Altersklassen und Männerbünde*) に強い影響を受けているからである<sup>5)</sup>。「独身男性の小屋」は文化人類学的な概念で、若い男性が一時期家族や女性から隔離されて共同生活を営みながら、大人の男の世界に参入するための通過儀礼が行われる場であると考えることができる。

ボイムラーのこの講演は全く同時刻に別の場所で講演を行っていたある人物に対抗する形で始められた。誰だろう、トーマス・マンである。

我々がここに集っているまさにこの瞬間に、現在の政体の最も重要な擁護者であるある人物、すなわちトーマス・マン氏がベルリンにおいて、9月14日に投票したあの若者たちに抗して発言している。この若者たちの本能と熱狂に対して恥ずべき言葉を吐いているのである。否、私はかの夜帰宅しながらドイツの若者に疑念を持つことはなかった [...] (Baeumler, S. 30.)

9月14日とは1930年のことで、その日ナチス党は総選挙の開票の結果大勝利を納め、わずかに12議席の弱小政党は一気に107議席を誇る第2党へと躍進したのである。その夜、ボイムラーはドイツの若者に意を強くして帰宅したらしい。マンが1930年10月17日にベルリンのベートヴェンザールで行った講演は „Deutsche Ansprache. Ein Apell an die Vernunft“ いわゆる「理性に訴える」で、そのなかでマンは迫り来るナチズムの脅威に警告を発していたのだった<sup>6)</sup>。マンはこの講演でヴァイマル共和国の内政・外交問題を分析し、ロマン主義的非合理主義と政治的運命論に抗して、9月の選挙において大躍進したナチスに対する市民の批判的覚醒を促していたの

である。

ボイムラーにとって急務と思われることは「ドイツの若者によってドイツの男性同盟を再生すること」(Baeumler, S. 31.)である。男性同盟には様々な形態がある。ボイムラーが挙げるのは、ローゼンベルクの列挙したものと一部重なるが、フリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーンの体操協会、ナポレオン解放戦争後のウア・ブルシェンシャフト(学生組合)、初期のドイツ青年運動、第一次大戦後の義勇軍などである。ボイムラーにとって大切なことは、要するに男性同盟においては「力が組織化される」(Baeumler, S. 32.)ということである。組織化された力は国家と政治のためのものであるということになる。「同盟はただ国家との関連においてのみ存在する。政治的理念がなくては同盟は無に等しい」(Baeumler, S. 32.)。古代の男性同盟から国家が発生したと見るボイムラーは、その展開は専ら敵の世界を想定しているという(Baeumler, S. 33.)。男性同盟には敵が必要なのである。「真の同盟は何らかの目的を持った道徳的団体ではなく、特定の、現実の、歴史的な敵の存在を前提とするひとつの実体である」(Baeumler, S. 33.)。では1930年のドイツにとって「特定の、現実の、歴史的な敵」とは何であったのか。ボイムラーの答えはやや戸惑いを覚えるような意外なものである。それは「ブルジョワ的生活様式」(Baeumler, S. 34.)なのである。

我々ドイツ人がブルジョワ的に(bürgerlich)、「都会的に」(„urban“)なることが我々の生の法則からの逸脱であるということを認識した瞬間に、まさにこの瞬間にドイツの男性同盟は再生したのである。

ブルジョワ社会に対する闘いと同盟の生成とは我々においては同義である。(Baeumler, S. 34.)

ボイムラーの理解する「ブルジョワ的生活様式」は非常にナイーブなもので、「都会的な『上流階級』」(städtische „gute Gesellschaft“)と説明されている(Baeumler, S. 35.)。そのような階級の理想は「教養のある、裕福な年金生活者」(Baeumler, S. 35.)であり、教養と金銭のみが人間を測る尺度となっている。この上流階級の目標は一律に「たくさん稼ぎ、良い身なりをし、しゃれた会話ができる」(Baeumler, S. 36.)ことにつきるというわけだ。このような時流は家庭内にも浸入しており、家庭はもはやブルジョワ社会の一部と化し、子弟を上流社会へ参入させるために躍起になっ

ている。

ポイムラーが目の敵にする都会、ブルジョワという要素が集中的にあらわれるのは「サロン」においてである。さらに「女性」と「フランス」が敵にまわされる。「若いも若きも女どもはドイツの若者に目をつけ、時にはおそらく、男でさえも、彼らに少しの間はいくばくかの注意を払うであろう」(Baeumler, S. 37.)。都会のブルジョワ「サロン」は同性愛の巢窟であるかのごとき仄めかしである。また「サロン」での如才ないブルジョワ的振舞いによって「上流社会」をわたっていく若い男性を描いたフランスの小説が、男性同盟の敵として名指しされる。「それはフランスの古典的小説、フローベールの『感情教育』である。もう一つの例はモーパッサンの『ベラミ』である。これらの小説ではいかに女性が上流社会に参入した若い男性の運命を決定するかということが描かれている。これらの小説は同盟の生の形式を知らぬ大地で発達してきたものである」(Baeumler, S. 37.)。フランスは女性が支配する、ドイツは男性の、同盟を求める若い男性の国であるという紋切り型は幾度となく反復される。「我々のところでは英雄的な資質を持つ若い男性は上流社会に背を向ける。彼は同年代の、また年長の友人を求め、同志と指導者を求め、師と手本を求め、同盟を求める」(Baeumler, S. 37.)。

ポイムラーにとっては「フマニテート」という概念も了承しがたいものである。これも男女の問題である。「ブルジョワ社会の精神の息のかかったところでは、男同士の関係に基づくあらゆる生の形式は死んでしまう。というのもブルジョワ社会には『フマニテート』というイデオロギーがあるのだが、それは『人間』という概念しか知らず。男と女を知らないからだ」(Baeumler, S. 38.)。男同士の友情が生の形式として繁栄するのは、ポイムラーによるとただ国家という形においてのみである。「祖国のない友情はないが、また友情のない祖国もない」(Baeumler, S. 38.)。男同士の友情の絆を弱めるのがあるとするれば、それは女性に対する性愛に他ならない。「性質の弱いものは[女性への；筆者]性愛によって男同士の関係の世界から完全に切り離される。彼らは結婚した後に舞台から消え去るか、性愛関係の中へ没落する。性愛関係が友情関係にとってかわるのだ」(Baeumler, S. 39.)。

ここで攻撃されるのは、またしてもトーマス・マンである。それがポイムラーの誤解に基づくだけに一層興味深い。

ボイムラーは1922年にマンが行った『ドイツ共和国について』(Von Deutscher Republik)にねらいを定める。ただしマンがいわば「変節した」という、22年当時支配的だった非難を繰り返すのではなく、男と女の性愛の問題として取り上げるのである。

友情関係は国家と関係があるが、性愛関係は国家とは何の関係もない。ドイツ共和国に関する講演の中でトーマス・マン氏は、デモクラシーは性愛的な要件であると定義した。デモクラシーは実際、女性と、女性との関係が優勢なところにおいてのみ維持されるのであり、友情が支配するところでは決して栄えないのである。(Baeumler, S. 39.)

トーマス・マンがデモクラシーは性愛的な要件であるとする時、それはボイムラーの言うような男と女の性愛の問題とは関係がない。「共和国論」のマンは、ハンス・ブリュアーの決定的な影響下にあった。ブリュアーは男性同盟の結束力は同性愛的な社会エロティシズムにあると主張したが、その点がマンの関心を大いに喚起したのだ。マンは1922年の演説において性愛的共同体としてのドイツ共和国を、表面上はホイットマンの『草の葉』のデモクラシー精神において構想するが、ホイットマンは単なる化粧板にすぎず、性愛の共同体という構想の中身はほとんどブリュアーであることは、これまでの研究によって説得的に指摘されている<sup>7)</sup>。

ボイムラーにとって性愛は一義的に男女間にしか成立しないらしい。それがマンを読み違えた原因であろう。マンがエロスをも含めた男同士の絆を視野に入れているのに対して、ボイムラーは友情や同志愛から性愛を一切排除するのである。

また社会の女性化(Feminsierung)の元凶をボイムラーは社会民主党(SPD)に求める。「社会民主党は性愛関係普及の宣伝局」(Baeumler, S. 40.)というボイムラーは、その証拠に、この党は男女混合の青年キャンプを支援しているし、同じく男女混合の労働者スポーツ連盟を創設したことを挙げる。特に後者は体操の父ヤーンのナショナリズムに淵源を持つ「ドイツ体操協会」(Die Deutsche Turnschaft)を押し退けようとしているので、一層問題視されるのだ。

フランス、女性、性愛、デモクラシー、社会民主党と来れば、当然次には「文明」という言葉に行き当たる。この構図はほとんどトーマス・マン

の『非政治的人間の考察』においても同様であったが、「文明」の対抗価値がマンとボイムラーでは異なっている。

フランス人は生まれながらの文明人である[……。かの地では「文明」(civilisation)が最高の言葉である。それに対して我々の最高の言葉は国家 (Staat) である。(Baeumler, S. 40.)

ボイムラーの論は最後の部分でやや錯綜してくる。家族、民族、国家の位置関係が男女という軸で整理されるのであるが、家族は男女が単位であるだけにどのように国家に編入してよいのか苦心しているようだ。「結婚においては二人の抽象的な『人格』が結ばれあうのではなく、特定の民族の男女が結ばれる。家族は社会道徳的な既成の事実ではなく、氏族(Sippe)の一部であり、したがって民族の一部である」(Baeumler, S. 42.)。しかし民族は、「社会」(Gesellschaft)の対抗価値としての民族は、男女を峻別するらしい。「我々のところでは『社会』にかわるものは民族である。民族は反ヒューマンズムの、反社会的に生き、感じ、思考する。[……] 民族は少年と少女、男と女を分離する。[……] この分節された民族に男性同盟は自己を編入する。兵士と兵士的な人間は社会になんとそぐわないことか。兵士は社会を理解せず、社会は兵士を理解しない。しかし民族と兵士は何と調和することであろう」(Baeumler, S. 42.)。男女の結合した家族は民族の一部だが、その民族は男女を分離するというわけだ。民族は男女を性愛的に結び付けるヒューマンズム、社会に抗し、男性同盟的な兵士の住処となる。

それではボイムラーにとって最も大切な国家にとって、家族と民族はどのような機能を持つのか。

家族は国家の「胚細胞」(Keimzelle)ではない。国家は家族のそれとは本来対照的な原則に発している。民族は有機的に成長する。しかし国家は有機的には成立しない。それは自由な男たちの行為と団結によって人為的に創られるのだ。(Baeumler, S. 42.)

このような行為と団結に参入しない男どもは「醒めた商売人か、女の尻にひかれる男か、薄のろなマイホームパパ」になるかのいずれかであると

いう脅しまで付いてくる (Baeumler, S. 42.)。

家族、民族、国家はこのようにボイムラーにおいてはきれいな入れ子構造の相似的形態はとらず、男女の結合 (家族) と分離 (民族)、男性だけの創造物 (国家) という点で説明されていることがわかる。

以上、ハインリヒ・シュルツに影響を受け、トーマス・マンを目の敵にしたボイムラーの講演を見てきた。ボイムラーはフランス、女性、性愛、デモクラシー、社会民主党、文明に対し、ドイツ、男性、友情、独裁、ナチス党そして国家を対置し、ベルリンで同時刻に語っているトーマス・マンと、聴衆の青年たちの「魂の障地とり」を闘っていたのだ。

### 3. 終わりに

ローゼンベルクとボイムラーというナチスの代表的イデオログに共通する傾向は、ここでは詳しく取り上げなかった反ユダヤ主義はさておき、両者とも男性性のみを崇拜し、ドイツ、友情、独裁、ナチス党そして国家にことごとく男性ジェンダーを振り分けていること、また反ドイツ的なもの、すなわちフランス、生殖を含めた性愛、デモクラシー、社会民主党、文明のすべてに女性ジェンダーを振り分けていることである<sup>8)</sup>。ドイツに敵対するものはすべて女性のジェンダーをもつと言っても過言ではない。したがってドイツの男性が最も恐れるのは、敵の勢力の拡大、敵の戦略による男性同盟の崩壊、つまり男性によるジェンダー配置が女性によって攪乱されること、すなわち具体的な社会・政治的領域とともに、ほとんど無意識の領域における女性解放ということになる。

ローゼンベルクの「女性解放論から女性を解放すること」とはすなわち「女性解放を行なってはならないこと」と同義である。男性同盟を基調とするナショナリズムにとって最大の敵は、女性が女性に振り分けられたジェンダーを拒否すること、すなわちジェンダーの攪乱に他ならない。

戦時に母性が強調されるのも、未来の兵士を産む性としての女性の役割を固定せんがためである<sup>9)</sup>。従軍看護婦<sup>10)</sup>はあくまで天使でなくてはならない。愛国婦人会の類いは夫と息子と恋人を喜んで国家に捧げ、銃後を守り、戦争のチア・リーダーとなり、「英雄死」を涙で購わねばならない。

目に見える実際の敵に対し、結束して、一元的に対峙しているかのように見えるナショナリズム体制は、実は内部に例えばジェンダー配置の問題

のような多元性を抱えている。いや「目に見える実際の敵」こそ虚構かもしれない。女性や同性愛者、ユダヤ人など性やジェンダーや民族といった多元性が、本来団結、結束を意味する男性的ファッショの、獅子 — こけおどしの獅子ではあるが — 獅子身中の虫なのである。

### 注

- 1) アルフレート・ローゼンベルクのテキストは Alfred Rosenberg: *Der Mythos des 20. Jahrhunderts*. Hoheneichen Verlag, München, 1936 (103.-104. Auflage) からのもので引用は (Rosenberg, S. 458.) のように示す。またアルフレート・ボイムラーからの引用は Alfred Baeumler: *Männerbund und Wissenschaft*. Junker und Dünhaupt Verlag, Berlin, 1934 からのもので、引用は (Baeumler, S. 30.) のように示す。なお、引用文中で傍点を付した部分は、オリジナルでは隔字での強調を表す。
- 2) ローゼンベルクは Syrier という言葉を使っているが、文脈からしてユダヤ人を意味しているものと思われる。
- 3) この文言は『20世紀の神話』の巻頭に献辞として掲げられている。
- 4) 大石紀一郎、三島憲一(他)編：『ニーチェ事典』、弘文堂、平成7年、581頁。
- 5) Vgl., M. Baeumler, H. Brunträger, H. Kurzke: *Thomas Mann und Alfred Baeumler*. Königshausen & Neumann, Würzburg, 1989, S. 174. なおシュルツの本は Heinrich Schurtz: *Altersklassen und Männerbünde*. Georg Reimer Verlag, Berlin, 1902.
- 6) Vgl., Thomas Mann: *Gesammelte Werke in 13 Bänden*. Fischer, Frankfurt a. M., 1990. Bd. 11, S. 870-890.
- 7) 例えば Hans Wißkirchen: „Republikanischer Eros. Zu Walt Whitmans und Hans Blühers Rolle in der politischen Publizistik Thomas Manns“. In: *Heimsuchung und süßes Gift. Erotik und Poetik bei Thomas Mann*. Hrsg. von Gerhard Härle, Fischer, Frankfurt a. M., 1992.
- 8) ちなみにユダヤ人も女性的であるという、オットー・ヴァイニンガーの『性と性格』(1903年)以来のラベリングをナチスは踏襲し、吝嗇で性的で非男性的な民族としてユダヤ人を貶める。
- 9) 戦時の女性ジェンダーをイコノロジー的に研究したすぐれた著作に、若桑みどり：『戦争がつくる女性像』筑摩書房、1995年がある。本書では主に日本の事例が取り上げられているが、ドイツのナチズムを考察する際にも非常に参考になった。
- 10) 現在では「看護師」とすべきだが、当時の名称にしたがった。